

女の爲の誰

石川蓮三

講談社文庫

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

誰の為の女

石川達三

昭和48年4月15日第1刷発行

昭和48年12月16日第4刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社大進堂

© Tatsuzo Ishikawa 1973

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

文庫

誰の為の女

石川達三

講談社

目次

誰の為の女

五

解説
年譜

野村尚吾
二三九

二五一

誰の為の女

桜井先生――

お返事をさしあげるのは、無駄なことだと知って居ります。これをあなたが受けとったとき、封を切る前に、あなたは顔をしかめるに違いない。つまり、あなたに取っては読みたくもない手紙であることを承知の上で、私はお返事を書いているのです。

実を申せば私も、こんなお手紙は書きたくない。もう一度あなたから軽蔑けいべつされるために、努力して手紙を書く必要はないと思います。しかしまた、あのお手紙に対して、もしも私がお返事をさし上げなかったとすれば、あなたはいつ迄までも、寝ざめの悪い思いをなさるに違いない。そう考えて、強しいて言えばあなたを安心させてさし上げるために、お返事を書くことと思ひました。あなたを安心させると同時に、私もまた自分の気持ちに、はつきりと一つの結着をつけ、ここに新しい扉とらを閉ざす必要があるのだということは、お解り下さると思います。

結論をさきに申しましょう。――

御懇切なるお手紙のおもむき、すべて承知いたしました。何の異存もございません。私は先生のおっしゃる通りに、先生の御希望なさる通りにいたします。

(ちやうど三くだり半になりました)

従つて、今日かぎり、先生とは赤の他人でございます。

たとい銀座の街角や、歌舞伎座の廊下で、不意にお会いすることが有ろうとも、お互いに口を拭つて、素知らぬ顔をすることに致しましょう。私は愚かな女でも、軽はずみな女でもありません。したがつて、先生をひとなかで恥をかかせたり困らせたりして、復讐を遂げようなどという気持は微塵もございません。先生の名譽を守ることが大事ですが、それ以上に私自身の名譽を守りたいと思います。そしてまた、先生に感謝すべきことこそあれ、復讐をしなければならぬやうな理由は、ございません。あの手紙を頂いた今でもまだ、一年数ヵ月にわたる永いあいだの、先生の深い愛情に対して感謝したい気持だけなのです。

こうは申しまでも、あのお手紙は本当に突然でした。あまり突然だったことを、少しばかり怨みがましくも思います。しかし、あのような絶縁状は、女の油断を見すまして、不意に叩きつけるのが一番効果的であるかも知れませんね。本当に効果的でした。文字通りの一刀両断。先生のどこに、これほど思い切りの良い、胸のすくような決断力がひそんで居たのかと驚いて考え直すほどお見事でした。

それに引きかえ、私はまるで馬鹿でした。男よりも女の方がずっと人が好いのではないでしようか。恋は盲目という通り、私はまるでめくらでした。お勤めから帰って見ると、アパートの部屋の扉のなかに、あなたのお手紙が投げこんでありました。取り上げて、裏を返すまでもなく、先生の筆跡と直感したとき、はつと胸を打たれて立ち竦んでしまいました。悪い予感があったの

でしょうか。それもいくらかは混っていたかも知れません。しかしそんな予感よりもっと強く私の頭にひらめいたことは、笑わないで下さいね、先生からとうとう結婚の申込みが来たと思ったのです。その申込みを、どんなに永いあいだ私が待ちこがれて居たことでしょうか！

あなたは今日まで、結婚ということを一度も口になさいませんでした。はじめの数カ月、私がまだあなたの患者であつた時は、それが当りまえのことでした。その後の七、八カ月、そのあいだも当りまえだったかも知れません。私たちが全身を以て、言葉の代りに皮膚をもつて、行爲をもつて、愛情の誓いを結んだ、その後になつてからも、あなたは結婚について、ついにひとことも言つてはくれませんでした。それはあなたに取つては理由があつたことなのでしょう。私は愚かにも、いつかは必ず先生の口からその言葉が聞かれるものと信じ、その時を待ち望んで、懸命な愛情をささげて来たつもりでした。

ほとんど手紙というものをお書きにならないあなたから、不意に厚味のあるお手紙を頂いたとき、とうとう来た！ と躍りあがるような氣持になつたのは、その為でした。

あのお手紙の、丁寧な字。……その文字を見たとき、悪い予感がありました。たとい絶縁状をお書きになるときでも、あんな冷たい字はお書きにならない方がいいと思います。情味のなきちゃんと整頓された、閱兵式みたいに直立不動の姿勢をした、棒っ切れみたいな文字の行列。

五へん、くり返して拝見しました。

私はあきらめの良い女です。なぜかと申しますと、努力すれば何とかなるといふ事柄と、いくら努力しても駄目な事柄とを、ちゃんと判別する知恵をもっているからです。駄目なものについ

ては、未練を残さずに諦めてしまふのが一番利口だということもよく知っております。この知恵は、いろいろな世間のなかで、いろいろな生活に揉まれて来た賜たまものです。つまりあなたがいうところの、（沢山の経歴）のおかげです。疵きずだらけになった女が、その疵の痛みによって教えられた、貴重な知恵なのです。先生のお手紙によって、私はまた一つ、新しい知恵をさずかりました。

桜井先生――

お手紙のなかの一番重要な部分について、少しばかり私の考えを聞いて下さい。

（……あなたには、何か僕の知らない沢山の経歴があるように思われます。僕は決してそれを責めるのではない。多分それはあなたに取って、致し方ないことだったのでしよう。僕はその事には触れないで現在の、あるがままのあなたをひたすら愛して行こうと努力して見たつもりです。しかし、そう思えば思うほど、僕の知らない部分が心に引っかけられて来るのです。殊ことに二人きりで居るとき、僕たちの心を隔てる堅い壁がここに有るということを意識せずには居られないのです。僕は責任ある男として、僕たちの結婚について、この数カ月、真剣になって考えて見ました。しかし何としても抜き難いこの壁に突きあたってしまうと、僕は決断が出来なくなってしまうのでした。このままで結婚したとすれば、二人を隔てる壁は一層冷酷なものとなって、僕たちを不幸に陥おちいらせるに違いない。して見れば残酷のようではあるけれども、むしろこのままでお別れしてしまう方が、少しでもお互いに傷つけることがすくなくて済むのではあるまいか、そう考えざるを得ないので。……）

は、た、ち、や、そ、こ、い、ら、の、世間知らずの青年じゃあるまいし、学識、道德、財産、それに社会的地位まで備わった、三十九歳の円満なる人格者である桜井先生が、まじめくさってこんな事を考えていらっしやるのかと思うと、私は笑い出したくなります。尤も、それがあなたの純真さであるのかも知れませんか。純真な男であるがために、純真さを失った女に絶望なさったのだと考えれば、本当にお気の毒。怨むどころではございません。

要するに先生のお手紙は、（俺は傷もの、なんか嫌だよ）ということですよ。他人が齧りかけた林檎を拾って、また齧るようなことは、どこの男だって嫌にきまっています。私は、あなたに拾って頂く資格のない、疵だらけの女です。でも、ひとことだけ言わせて下さい。先生は、私が疵ものであることを、いつから御存じだったでしょうか。私は三十二。お知りあいになった時は三十一。それまで何の経歴も無い女だと御考えになっていたでしょうか。私が疵ものであることを承知の上で、私を箱根へおさそいになったのではなかったでしょうか。（むしろこのままでお別れしてしまう方が、少しでもお互いに傷つけることがすくなくて済む）と仰言るならば、なぜ箱根までも私をお連れになって、お互いの傷を深くするような事をなさったのですか。

こう申しますのも、実はあなたへの嫌がらせみたいなのものでして、あなたのお気持はわかっているのです。あなたの代りに弁解して見ましようか。……

（いや、僕は、思い切って、二人の関係を抜きさしならない所まで持って行こうと考えたのだ。そうすれば、二人の間を隔てている壁なんか、吹っ飛んでしまいかも知れないと思った。

いつまでも過去にこだわっている僕自身の気持を、その事によって清算してしまいたかった。ところが、やはり失敗だった)

しかし、これもまた御自分にだけ都合のよい、体裁の良い弁明であって、あなたの本心はもう少し悪辣あくらつだったかも知れません。結局、疵きずものである私には望みを捨てていらした癖に、捨てる前にちよつとだけ、この女を自分のものにして見たいという下劣な根性が無かったかどうか。更に、どうせ疵きずものなんだから、俺がもう一つ疵をつけたからって、特に責任を負わなくてはならぬという事もなからう、という、火事場泥棒みたいな根性もお有りになつたかも知れませんね。(どうせ疵きずもの)というお考えが根底に有るからこそ、一刀両断、手紙一本で縁を切って、特にお氣持が痛むこともないのだらうと思われます。

私はとうとう、疵きずものの扱いをされてしまいました。実は、始めからわかつて居たことです。あなたが、何も知らずに私に近づいて来たとき、必ずいつかは私の古い疵が問題にされ、そこから破局が来るにちがいないと、私は知って居りました。永年の経験で、疵きずものを嫌きらう男の氣持もわかつて居りますし、その疵を問題にされては、どのような女の弁明も役には立たないのだということも承知して居ました。ですから、最初のころ、私はあぶながって、先生から遠ざかろうと努力していたのでした。

破局が、少しばかり遅く来ただけで、結果は同じことでした。もしも先生の仰言ることが全部正直なお氣持であるならば、先生はこんな疵きずものの女に引つかかって、藻掻もがいたり悲しんだり、苦しんだり、散々ひどい目に会わされたということになります。私にとっては予定のコースで

した。ほんの少し遠回りをしただけで、予期した通りの結果が来しました。して見れば、弄もてあそばれたのは先生の方かも知れませんか。

お手紙によりますとあなたは、私の過去に沢山の経歴があるらしいと察して居りながら、（僕はその事には触れないで、現在の、在るがまま）の私をひたすら愛して行こうと努力して下さったのに、……（そう思えば思うほど、僕の知らない部分が心に引っかけ来て来るのです。殊に二人きりで居るとき、僕たちの心を隔てる堅い壁が……）と書いていらっしやいます。これはどういう訳でしょう。

先生は立派な紳士でいらっしやいます。まじめで、礼儀正しくて、女性についても一個の人格を認め、決して軽んじたり馬鹿にしたりするような言葉づかいはなさいませんでした。さすがに、医学を以て身を立て、世間からは（お医者様）と、様の字をつけて呼ばれる御身分にふさわしい、立派な紳士でいらっしやいました。疵ものの私に対しても、常に私の意志を尊重し、私の人格を認め、軽蔑したり強制したりするような事は、一度もございませんでした。まことに尊敬に価する男性でございます。

そういう紳士の礼儀作法にしたがって、私の過去に何か沢山の経歴があるらしいと察しておいでになりながら、あなたはその古疵には決して触さわろうとはなさいませんでした。私の方が却かえつて、知らせずに居ることの息苦しさに耐えられなくなって、ふと告白をしようと思つと、あなたは急いで話題を変え、話を外そとらし、私の告白をそれとなく思い止まらせるように仕向けて来られました。（僕はその事には触れないで、現在の、在るがままのあなたをひたすら愛して行こう

とした……)とお手紙にお書きになったその深いいたわりのお気持は、身に沁みて嬉しく、有難く思うのです。

けれども、(僕の知らない部分が心に引かかって来る)と言いながら、なぜ先生は、(僕たちの心を隔てる堅い壁)を、とり除こうという努力をなさらなかったのでしょうか。その堅い壁を突きやぶり、心の隔てを取り去って、あなたの知らない部分をことごとく白日のなかに晒し、私の過去の一切の経歴を知り尽くしてのちにはたして私たち二人は結婚生活に耐え得ないものであるかどうか、それを考えて見ようとはなさらなかったのでしょうか。あなたは紳士であるが故に、私の過去の秘密に立ち入ろうとはしなかったのだと言えば、一応は立派にきこえますけれども、それならば、あなたは御自分が紳士づらをして居たい為に、当然知らなければならぬ私の経歴から顔をそむけ、あなたの心の中に壁を築いてしまったのではないのでしょうか。(僕たちの心を隔てる堅い壁)というのは、私の経歴ではなくて、紳士づらをしたあなたの心の壁ではなかったのでしょうか。

あなたの心に引かかって来るものが、あなたの愛情の邪魔ものであったというのが本当ならば、あなたは敢然として私の過去を探り、私に告白を求めるべきではなかったでしょうか。そして私としても、正面から告白を要求される方がどれくらい嬉しかったかも知れない。女にむかつて告白を要求するというのは、女を愛しようとする男の努力です。二人の愛情の通路にある邪魔な石を取り除こうとする、ひた向きな努力です。女は泣きながら、しかし真剣な喜びをもって、洗いざらい、何もかも告白し、そして謙虚な心で、身をなげ出して、男の判決を乞う気持になれ

るのです。ところが先生は、（その事には触れないで、現在の、あるがままの）私をひたすらに愛するという口実のもとに、私に告白を求めようとはなさらなかった。

ひねくれた言い方を致しましょうか。……行きずりの娼婦と、かりそめの一夜を過す男は、その娼婦にむかって告白を要求することはございません。沢山の過去の経歴があることは承知で、（その事には触れないで、現在の、あるがままの）娼婦に、かりそめの愛情を注いで、そのことでささやかな満足を感じるのです。

先生は紳士づらをして、在るがままの私を（ひたすらに愛して行こうと努力した）などと、綺麗な口を利きながら、結局は私を一人の娼婦と同じように扱っておいででした。だからこそ、過去の疵には触れない、などと、同情めかした言葉のかげにかくれて、私の告白を求めようとはなさなかった。そのことに、先生は何と弁明なさろうとも、本質的なあなたの不真面目さを、私はちゃんと感じて居ります。

多分、あなたは始めから、この女は疵ものだ、到底結婚できるような相手ではないと、はっきり心を定めて居られたことでしょう。従って、私の告白などは必要でなかったのです。むしろそのような告白を聞かされることは、あなたに取って迷惑なことだったと思うのです。

あなたは紳士の礼儀として、私の過去に触れなかったのではなく、いかにも紳士らしい陰険な、深謀遠慮によって、先の先まで計算しつくして置いて、私の過去を聞こうとしなかった。それはあなたの狡猾さです。卑怯さです。

もしも私の過去の告白を聞いてしまえば、あなたは私の経歴を、許さなければならぬ。少な